

道標

200件を超える出前講義を行ってきた。最初のころは、サイエンス、つまり、植物の不思議とかを講義していた。仙台のとある小学校に伺ったとき、プレゼンテーションの自己紹介欄に「どこで何を決断するかで、それなりの人生がある」と書いておいたことがきっかけで、転機が訪れた。その小学校の校長先生が「子供たちに人生論も語っていただけるのでしょようか？」と言われ、自分が歩んできた道のりを小学校から振り返り、なぜ科学者になったのか、博士になったのか、なぜ今があるのかといったことの講義をすることになった。2007年10月のことであった。

この講義をするにあたり、自分なりに小学校、中学校、高校、大学で何を考えて、得意だったことや苦手なことなどの整理から始めた。好きだったの

夢とキャリア教育

人生に大切な決断力



東北大学大学院
生命科学研究所教授

渡辺 正夫

は理科と算数。苦手は体育。鉄棒で手を離して落ちたことがあったようで、担任の先生がこんな子供は見たことがないと親に言ったらしい。それくらい運動音痴であった。小学校の卒業文集には「ゆめは科学者になることです」

の中の「科学力」のすゝき、科学用語など、小学生で習う理科の科学力を超えたものが心を動かした。その後、中学、高校、大学と進学し、何に興味があり、どんな道を歩もうとしたのか、今でいう「キャリア教育」を講義した。それきりの講義だと思っていた。

ところが、ここ数年、高校での出前講義は、キャリア教育の方が多い。なぜなのかをふと考えたとき、高校まではクラス・教科担任ともほとんど学校側が決定し、自分の側には選択権がないことが多い。しかしながら、大学、社会人になれば、どんな勉強をしようか、研究をしようか、サークル活

と書いた。その当時の科学者といえば、テレビアニメに出てくる博士や教授。白衣姿は科学へのあこがれをさらに高めた。マジンガーZの兜博士や弓教授、科学忍者隊ガッチャマンの南部博士、仮面ライダーの緑川博士。アニメ

動をしようか、就職先をどうしようかなど、自分での決断が大切になってくるという過渡期になるからではないだろうか。つまり、決断のパターンで人生は大きく変わるといふことである。

ふるさと伝言

自分自身を考えたとき、高校3年の大学入試の共通1次試験に失敗した。担任の先生と相談して、仙台に行くことが大きな決断であった。結果、東北大農学部で、アブラナ科植物における自家不和合性研究の第一人者、日向教授と出会うことができ、それをきっかけに多くの研究・人生の師匠と巡り合うことができた。目標の点数がとれ、第1志望に行っていたら、絶対に今の人生はない。今だからそう言える。夢ふくらむ4月にこんなことを言わなくてもという方々もいるのかもしれない。ただ、大切な師匠に会ったことに気が付かないのでは困る。そのためには自分を振り返り、将来、自分はどのような道に進みたいのかを早いうちから考えてほしい。そうすれば、大学のオープンキャンパスは単なる大学・研究室の見学でなく、教授陣と議論して自分や自分の将来像とフィットする大切な師匠に出会える場になるのではと思う。大学、就職選択をこんなふうに考えてみてはどうだろうか。

(わたなべ・まさお、今治市生まれ)